

世阿弥著・小西甚一編訳「^{ふうしかでん}風姿花伝・^{かきょう}花鏡」たちばな出版 2012年3月2日刊を読む

問。能において、それぞれ得意があつて、ずいぶん腕のわるい役者でも、その得意とする方面だけは、上手よりもまさった点を持つことがあります。これを、上手な役者が我が芸としないのは、できないのでしょうか、あるいはまた、してはいけないのではないのでしょうか。

1. (1) 能に限らず、一切のことに、それぞれ得意というわけで、生れつきすぐれた点があるものだ。
(2) 芸位からいえば上の役者でも、下手の得意芸に及ばないことがある。しかしながら、これも、ただ、まあまあ上手といわれる程度の役者について考えられることである。
(3) ほんとうに技術も芸理も究めつくした上手ならば、どんな方面の芸だって、できないはずがあろうか。
(4) つまりこれは、技術と芸理との両面を究めつくした役者が、万人に一人というほども無いからなのである。
(5) いま「無い」と言ったのは、だれも芸理の深奥に心を潜めないで、自分の芸に慢心するからである。
2. (1) いったい、上手だって欠点はあるし、下手だって長所はかならずあるものなのだ。
(2) ところが、これを真に見分ける人もないし、当人もそれを自覚しない。
(3) 上手は、自分の名声に頼り、芸達者にごまかされて、欠点に気づかない。
(4) また下手は、もちろん研究反省などしないから、欠点も自覚しなければまた、自分にたまたま長所があつてもわからない。
(5) だから、上手も下手も、互いに他人の意見を聞かなくてはならない。
(6) しかし、技術と芸理とを究めつくした役者ならば、ちゃんとわかるだろう。
3. (1) どんなにくだらな役者の芸でも、良い所があると認めたならば、上手でも、それを学ぶべきである。
(2) これが最善の行きかたである。
(3) 良い所を見ても、自分より下手な者の芸なんか手本にしたくないと思う勝手な争い心がもしあれば、その心に束縛せられて、自分の欠点も、おそらく気づかないだろう。
(4) こんなのが能の研究をおろそかにする態度というものである。

- (5) また、下手も、万一上手の欠点に気がついたならば、「上手でさえも欠点はあるものだ、まして初心の自分には、さぞかし欠点が多いことであろう」と思い、自覚できない欠点を恐れて、他人の批判も聞き、自分でも考究反省したならば、いよいよそれが研修となって、能も速やかに上達するであろう。
- (6) もしそうしないで、「自分ならあんなへまはやらないのに」など慢心を起すならば、それは、自分の長所をも実はわきまえていない役者だというべきである。
- (7) 良い所を自覚しないから、悪い所まで良いかのように思うものである。そんなふうだから、いくら年数だけかけても、能は上達しないのである。これがすなわち下手の根性なのだ。

4. (1) だから、上手でさえも、慢心があれば、芸は下るはずだ。
- (2) まして、未熟な者の慢心においてをやである。
- (3) よく研究反省してみよ。
- (4) 上手は下手の手本、下手は上手の手本だと思って、工夫をこらすがよい。
- (5) 下手の長所を学んで、上手が自分の芸に摂取するのは、この上もない筋みちである。
- (6) 他人の欠点を見るのでさえ、自分の手本になるのだ。
- (7) まして結構な所なら、もちろんというもの。
- (8) 「研修はしっかりせよ、勝手な争い心は有ってはならない」という戒めは、この点についてのことだろう。

P76 ~ P78

2019年12月13日(金)